

窓社
MAGDO SHI

定価1880円(本体1825円)

特集 豊満なるジャーナリズム

窓社

1994 AUTUMN

冒険と誘拐と報道 ⑨ 報道されて知ったマスコミの表と裏
 新聞と政界再編と政治学者 ⑩ 佐々木毅氏における〈座気離脱〉
 小沢一郎と大新聞ジャーナリズム ⑪ 『開かれた記者会見』
 社内論争よ、起これ！ ⑫ 朝日新聞社の経験から
 ジャーナリスト志望者の現在 ⑬ 入社する人・退社した人16人に聞く
 『週刊金曜日』に未来はあるか ⑭ あなたへの手紙
 日本ジャーナリズムの構造転換 ⑮ メディア理論と物語の貧困化
 人間と歴史への執着 ⑯ 岩波書店のこれから
 辺境と未来への越境 ⑰ 田畑書店のこれから
 日本のジャーナリストへ ⑱ スーパータンカーとなった大新聞

小浜逸郎
 林 壮一
 江本嘉伸
 *
 Z・メドベージェフ
 R・メドベージェフ
 *
 服部貴康
 杉山光信
 石飛 仁
 大谷 健
 ハサラ・プレス
 宮崎裕子
 香内三郎
 安江良介
 石川次郎
 K・ウケルツェン

新聞の未来

北朝鮮留学記・補遺

なぜ北朝鮮の真実は報道されないか

●進歩派ジャーナリズムに問う

李 英和 8

特集 遷流するジャーナリズム

冒険と誘拐と報道

●報道されて知ったマスコミの裏と裏

服部 貴康 18

新聞と政界再編と政治学者

●佐々木啓氏における空気の離脱

杉山 光信 47

小沢一郎と大新聞ジャーナリズム

●開かれた記者会見の意味するもの

石飛 仁 83

社内論争よ、起これ!

●朝日新聞社での経験から

大谷 健 58

ジャーナリスト志望者の現在

●入社する人・退社した人16人に聞く

バサラ・プレス 96

『週刊金曜日』に未来はあるか

●一読者からあなたへの手紙

宮崎 裕子 113

日本ジャーナリズムの構造転換

●メディア理論と物語の貧困化

香内 三郎 166

ジャーナリズムとしての出版の可能性

人情と歴史への執着

逆境と未来への挑戦

安江 良介 128

石川 次郎 145

日本のジャーナリストへ

●スーパータンカーとなった大新聞

K・ウォルフレン 66

全国大学ジャーナリズム関係講座教員アンケート

- | | | | | | | | |
|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|
| 浦 達也 | 高 前 伸 | 岡 正 夫 | 本 田 命 吉 | 廣 壽 雄 | 滝 沢 正 樹 | 岸 田 功 | 加 園 三 郎 |
| 吉 田 純 正 | 井 上 隆 夫 | 吉 野 隆 夫 | 野 村 信 彦 | 多 田 実 | 土 屋 礼 子 | 芝 田 正 夫 | 武 市 英 雄 |
| 市 川 啓 一 | 中 島 隆 夫 | 衣 笠 祥 夫 | 須 藤 修 | 諸 橋 泰 樹 | 田 宮 武 | 佐 藤 卓 己 | 阿 部 汎 克 |
| 中 川 祐 輔 | 岡 本 隆 夫 | 前 田 隆 夫 | 松 本 一 朗 | 正 田 二 郎 | 岩 倉 誠 一 | 古 山 登 | 増 田 卓 二 |
| 中 野 収 | 橋 本 隆 夫 | 井 上 隆 夫 | 石 川 旺 | 長 尾 龍 人 | 日 高 一 郎 | 青 木 貞 伸 | 西 野 泰 司 |
| 花 田 義 一 | 田 村 隆 夫 | 渡 辺 武 進 | 後 藤 文 康 | 賀 沢 洋 文 | 伊 藤 陽 一 | 島 守 光 雄 | 川 名 宏 |
| 原 田 三 朗 | 野 村 隆 夫 | 森 田 隆 夫 | 田 村 紀 雄 | 植 田 康 夫 | 岩 瀨 美 克 | 加 藤 晴 明 | 小 田 原 敏 |
| 鈴木 雄 雅 | 赤 尾 光 史 | 神 谷 秀 雄 | 渡 辺 孝 一 | 有 山 輝 雄 | 赤 尾 光 史 | 小 山 豊 彦 | 君 塚 洋 一 |
| 川 和 夫 | 森 田 隆 夫 | 山 根 隆 夫 | 刀 根 正 久 | | | | |
- * 副読員掲載

183

再発在復重刊「ロンドン・モスクワ」

ソル・エニ・ソイはどこへ行く

●進歩派ジャーナリズムに問う

Z・メドベージェフ
R・メドベージェフ

214

窓 21

21

窓

季刊 読者の合理的な総論誌

レポート

『開かれた記者会見』の意味するもの

石飛 仁 83

提言

社内論争よ、起これ!

◎朝日新聞社での経験から

大谷 健 58

投稿

ジャーナリスト志望者の現在

●入社する人・退社した人16人に聞く

バサラ・プレス 96

投稿

『週刊金曜日』に未来はあるか

●一読者からあなたへの手紙

宮崎裕子 113

読考

日本ジャーナリズムの構造転換

◎メディア理論と物語の貧困化

香内三郎 166

ジャーナリズムとしての出版の可能性

人間と歴史への執着

◎岩波書店のこれから

安江良介 128

辺境と未来への越境

◎田畑書店のこれから

石川次郎 145

日本のジャーナリストへ

●スーパータンカーとなった大新聞

K・ウオルレン 66

全国大学マスコミ関係講座教員アンケート

浦 達也	高橋耕起	楓 元夫	本田鈴吉	原 寿雄	滝沢正樹	岸田 功	加国三郎
吉田健正	津金澤隆廣	若杉 正	牧野信彦	多田 実	土屋礼子	芝田正夫	武市英雄
市川 昌	中島善範	森 可昭	須藤 修	諸橋泰樹	田宮 武	佐藤卓己	阿部汎克
中川祐輔	岡村黎明	前沢 猛	松本 一朗	正田喜二郎	岩倉誠一	古山 登	増田卓二
中野 収	伊藤誠二	井上輝子	石川 旺	長屋龍人	日高一郎	青木貞伸	西野泰司
花田達朗	田村耕介	渡辺武達	後藤文康	氣賀沢洋文	伊藤陽一	島守光雄	川名 宏
原田三朗	野上 明	斧 泰彦	田村紀雄	植田康夫	岩瀬美克	加藤晴明	小田原敏
鈴木雄雅	赤尾晃一	仲佐秀雄	渡辺みどり	有山輝雄	赤尾光史	小宮山恵郎	君塚洋一
川竹和夫	森脇逸男	東山楨之	刀塚正久				

* 到稿順掲載

183

越境往復書簡

ソル・エー・ツインはどこへ行く

●花崗なる地獄のアイマス

N・ドページワ
R・ドページワ

214

スポーツ・ジャーナリストの躰き

◎テレビマンユニオンとの差別

林 壮一 6

アエミニ・アジアズムを排す

小浜逸郎 2

モンゴルの文字改革と日本の支援

江本嘉伸 4

『国境なき政治経済学へ』.....長尾龍一

『東京循環の理論』.....稲葉振一郎

『ニッポン貧困最前線』母さんが死んだ.....村山正司

『遺伝子マッピング』.....市野川啓孝 『在日韓国・朝鮮人』.....住吉雅英

『日本近代文学と差別』.....加藤秀一 『モスクワで溺死された日本人』.....河西英通

『まだ死ぬ書き手へ』老親とともに生きる『富沢賢治の青春』青年よ、侵略の銃を取るな.....編集部

202

アンケート

ジャーナル

コラム

読考

「不均衡なもの」の擁護

▼加藤秀一

差別を主題として「昏く」ことは不可避的に「差別とは何か」を理解することを要求するが、他方おそらく多くの差別論が主観的には志向しているはずの反差別の運動は、そうした「理解」を徹底して拒否すること、すなわち「糾弾」においてのみなされる。ここに差別論特有のジレンマが果てなく余地がある。言うまでもなく硬直した糾弾はしばしば差別の沈滞と極端化へと帰結し、したがって実践的意義からも前者の意味における「論」が必要なのだが、しかしそれが定義上差別の「疑惑」を知る者にしか可能ではなくしたがって差別を論じる言葉がしばしばどこから燻々としてみえるところなら、そこから差別と「昏くこと」をめぐるニヒリズムを引きだすのはたやすいことだろう。

だが「昏くこと」の固有性において差別との闘争を真に意識するならば、まず右の如く「疑念」がシレンマこそが紛争

されなければなるまい。差別のメカニズムの分析・理解をつねに志向しつつ、「差別とは何か」という問いをめぐって観念論的な問いを拒絶する必要があるのだ。この問いを掲げるときわれわれは、無根拠を本質とする差別現象の背後にいつのまにか根拠を捜し、その陳腐な「イメージ」に呪縛されてしまう。だから差別論と糾弾とは徹底して融和しがたい二つの「運動」でありつつ、こうした差別の観念論化・非歴史化に対して共に抗しなければならぬだろう。

雑誌『批評空間』に「差別とエクオリチエール」と題して連載された文章を新たにまとめなおした本書の優位性は、右の事案にあくまで自覚的であることに支えられている。現在の「言葉狩り」騒動にまで至る部落解放運動の歴史性を細部において注視しながら、「行為にあらず、行為に関する意見こそ、人を動かすものぞ」という言葉をあえて第一

章の扉頁として選ぶ本書は、差別論と糾弾との緊張を全篇に貫流させている。本書によれば、藤村『破戒』から諸々のとるに足らぬ作品に至るまで、部落問題をとりあげた日本近代文学は、そこに描かれる被差別者を種端で恣意的な「イメージ」に還元しつつつづけてきた。それに対し、『水平社宣言』に噴出した「不均衡なもの」は次第に鋭角を削り取られ、差別者の同一性を相俣する相対的差異に回収されてきた。こうした分析を経て本書最終章で展開される中上健次論は、したがって同一性／差異の構造そのものの転覆を、荒々しい差異による日常性の亀裂を、踏ることになるだろう。ここにあるのは文字通り糾弾の擁護であるが、ただしそれは、静態的な制度に臨することを拒否した厳密な「運動」としての、したがって著者が中上の作品世界にみた「終わることのない何か」としての〈糾弾〉なのである。

日本近代文学と〈差別〉

渡瀬直己



〈人間の劇〉の衝撃

▼河西英通

今から二〇年ほど前、「民主連合政府」の夢が語られていたころ、ごく至近距離で野坂参三を自撃したことがある。白髪で小柄なその姿はまさに「愛される共産党」の象徴であり、われわれに安心感を与えた。晩年まで戦前・戦後を通じた日本共産党の生き証人として「歴史」を語り、誰しもが彼もまたその「歴史」のなかに静かに退場していくものと思っていた。しかし、ソ連崩壊後に発見された新史料によつて、彼の語った「歴史」はヒストリーではなく、ヒス・ストーリーであったことが明らかとなった。

著者の加藤哲郎氏はすでに本誌第19号に「歴史における参三と『昏く』」を発表して、戦前日本共産党（コミンテルン日本支部）における粛清問題の経緯を描いているが、本書はその全面的な展開である。第1章「『昏く』の解明」はソ連共産党、コミンテルン、各

のべて、スターリン支配のメカニズムを教えている。「第1章 昏く」の昏く」は粛清問題をめぐる現在の研究動向、史料状況の整理であり、「第2章 疑惑の噂の考現学」から「第7章 疎外社会の逆泳術」までが、片山潜・野坂・山本懸蔵・国崎定庵らに在る相互の共産主義者たちの相互関係の論述である。ポイントは一九二八年の三・一五事件時の山本逃亡にまつわる「疑惑の噂」の検証である。なぜなら、スターリン粛清期においては共産主義者といえども日本人はみな「偽装スパイ」と疑われており、入国に「疑惑」があるものには即刻逮捕が待ち受けていたからである。野坂は保身のために、山本の「疑惑」を内通した。しかし、山本はだんなる犠牲者ではない。彼は自己の潔白を証明するために、「疑惑」の出所を国崎に求め、彼を告発する。背景には山本が捕縛した相手片山と国崎の連帯があつ

た。この点、本書の副題は著者の意図を離れて誤解を招きやすい。国崎も山本も三七年に逮捕され、国崎は同年、山本は三九年に銃殺されるが、その悲劇は質が異なる。

悲劇という点では、本書の単主役岡田豊子のそれが国崎以上に胸に迫る（終章）。彼女は演出家の杉本真吾と海大國境を越境した。三八年のことである。このタイミングだけでも悲劇的である。二人はなおソ連社会にたいして幻想を抱いていた。無罪なら、真本真吾がスターリン体制を擁護していたころ、戦後、真本真吾は岡田豊子に同情的な「インテリ」(旧体制)を懸念しながら、国崎に「おアツタリ」が有効であったとするその歴史認識を問題であること書いている。

戦前・共産制を一点の星とし、加藤がいた最も過激な人びとが地獄に突き落とされたのである。

モスクワで捕縛された日本人

1941年共産党と国崎定庵、山本懸蔵の追憶

加藤哲郎



『人間の劇』

加藤哲郎

文芸春秋 一九八七年

窓社
MADO
SMA

定価1880円(本体1825円)

ISBN4-943983-81-2 C3030 P1880E

争点となる選挙 自選自決の「エトピア」論

選挙問題

11

窓

論争未発の象徴天皇制 ● 島根大学「小論文」入試問題とその波紋
検証不在の「ちびくろサンボ」絶版問題 ● なぞ学会は論争を忌避するのか
論争無用の「科学的社会主義」 ● 萎縮する日本共産党分析のための「資料
起死回生の社会主義論 ● もつと議論を!

問題としての野坂参三 ● 歴史の抹消と沈黙は許されるか

*
エトピアってなんだ?! ● 手足調和的なものとの訣別
ナウシカあるいは旅するエトピア ● シンク 笠井潤 そして宮崎駿
『風の谷のナウシカ』試論 ● へ連登し死者たち
子どもとエトピア ● くいまとこころへの帰還

*
北朝鮮留學記 北朝鮮のなかの日本、日本のなかの北朝鮮

- 石村多門
- 小浜透郎
- 江本嘉伸
- * 中野徹三
- 宮本太郎
- 石飛 仁
- * 米谷匡由
- 守 一雄
- 高橋彦福
- 海野八重
- 和田春樹
- 加藤哲郎
- * 宮崎 敏
- 稲葉操一
- 加藤秀
- 森田伸
- * 李 英三

	日本の知性のアキレス腱	石村多門	2
コラム	全共闘世代への反感について	小浜逸郎	4
	一九九四年二月三日付『読売新聞』●悪法について考えてみる	江本嘉伸	6

特集1 回避される論争

天皇制	論争未発の象徴天皇制	*資料1 島根大学法文学部一九九四年 度「小論文」入試問題	米谷匡史	20
	◎島根大学「小論文」入試問題とその波紋			

差別	検証不在の『びくろサンボ』絶版問題	*資料1 改題「子とクロさんぼ」全文	守一雄	39
	◎なぜ学会は論争を回避するのか			

共産党	論争無用の『科学的社会主義』	*資料1 日本共産党中央委員会御中 資料2 最終通告を受けたお知らせ 資料3 学園領域と市民社会理惑への推論展開	高橋彦博	54
	◎萎縮する日本共産党分析のための一資料			

社会主義	起死回生の社会主義論	*文献一覽	海野八尋	74
	◎もつと議論を!			

対敵	問題としての野坂参三		和田春樹 加藤哲郎	89
----	------------	--	--------------	----

特集2 世紀末の「エトピア」論

エトピア	エトピアってなんだ!?	◎学際論的・知的なものとの訣別	宮崎駿	112
------	-------------	-----------------	-----	-----

水辺の存在	ナウシカあるいは旅するエトピア	◎ロバート・ノジック 笠井潔、そして宮崎駿	稲葉振一郎	137
-------	-----------------	-----------------------	-------	-----

解放の源泉	『風の谷のナウシカ』試論	◎「追憶」と死者たち	加藤秀一	180
-------	--------------	------------	------	-----

最後の残照	子どもとエトピア	◎くまもと三三の帰還	森田伸子	196
-------	----------	------------	------	-----

脱離の脈絡	福祉国家を超える戦略	◎スウェーデン 社民党の挑戦	宮本太郎	227
-------	------------	----------------	------	-----

真実の行方	誰が誰であるか?	◎東郷保安警察文書はとこまで解読されたか	中野徹三	247
-------	----------	----------------------	------	-----

戦後史の死角			石飛仁	214
--------	--	--	-----	-----



論争無用の「科学的社会主義」

●萎縮する日本共産党分析のための一資料

資料1 11月号の「科学的社会主義」
資料2 11月号の「科学的社会主義」
資料3 11月号の「科学的社会主義」
の掲載状況

高橋彦博 54

起死回生の社会主義論

●もつと議論を!

*文献一覧

海野八尋 74

問題としての野坂参三

●野坂参三の文学的考察

和田春樹
加藤哲郎 89

特集 11世紀末のヨーロッパ論

ユートピアってなんだ?!

●正統的・和的・なものの差別

宮崎駿 112

ナウシカあるいは旅するユートピア

●ロバート・ノジック、笠井潔、そして宮崎駿

稲葉振一郎 137

『風の谷のナウシカ』試論

●「道徳」と死者たち

加藤秀一 180

子どもとユートピア

●くいと三三三の帰還

森田伸子 196

福祉国家を超える戦略

●スウェーデン社民党の挑戦

宮本太郎 227

誰が誰であるか?

●東独保安審議文書はどこまで解説されたか

中野徹三 247

戦後史の死角

●戦後未処理問題の現在

石飛仁 214

北朝鮮のなかの日本、日本のなかの北朝鮮

●通国を覆う軍い影は何を意味するか

李英和 8

- 「リウアイアサン」『援助原論』……住吉雅美 「エイズ! アメリカの闘い」……北沢三郎
- 「スウェーデン発 高齢社会と地方分権」……村山正司 「失われた吾所川原」……河西英通
- 「ニッポン思想の首領たち」『黄金の都 シカンを握る』 『台湾支配と日本人』 『三・一五入門』……編集部

『季刊窓』総目次 ●創刊号(一九八九年)〜第21号(一九九四年)

267



窓

[12] 野野人等「日本経済開発の政治経済学序説」、『日本海
交流の政治経済学』桂野房、一九九四年。

[13] Konai, Japo, "Transformational Recession: The Main
Cause", *Journal of Comparative Economics* 19, 1994.

[14] 野野人等「社会主義と資本主義の改革原理」、『金沢大学経済
論叢』第二十九号、一九九二年三月。

[15] 原田信雄「新稿論」有斐閣、一九六七年。

[16] 菊本隆治、北野正一「共有と集積、分産」、『国民経済学雑誌』
一六二巻三号、神戸大学、一九九〇年九月。

[17] 藤田豊「ソヴェト商品生産論」世界思想社、一九九二年。

[18] 望月清司「ゴータ綱領批判」(マルクス)解説、岩波文庫、一
九七五年。

[19] 大谷積之介「『現存社会主義』は社会主義か」、『経済学林』
法政大学、第五八巻三、四号、一九九二年三月。

[20] 大西広「資本主義以前の『社会主義』と資本主義後の社会主義」
大月書店、一九九二年。

[21] 小杉修二「地球温暖化時代における社会主義論」、『現代
と展望』三六号、一九九三年。

[22] 角田修二「協同社会の経済システム—アメリカ、ラティカル
派エコノミストの経済民主主義論」、『協同の社会システム』法律
文化社、一九九四年。

[23] 田中雄三「社会主義、市場、私的所有」、『市場経済—その
理論、歴史、政策』創谷大学、一九九一年。

[24] コルナイ、ヤーノッシュ「経済改革の可能性」岩波書店、一九
八六年。

[25] Bengt & Raski, K. "From Marx to the Market: Socialism in
Search of an Economic System", Oxford University Press, 1989.

[26] B. マンデル「労働者管理／評議会／自主管理」特原彰治訳、
『労働者管理』1990。

[28] 第二九集、一九九二年。

[29] 村岡到「協同社会主義のために」、『社会主義の風和』世界書
院、一九九三年。

[30] 田畑 敏「マルクスとアソシエーション」新泉社、一九九四年。

[31] 石塚良次「社会主義の再生と市場経済の幻影」、『情況』一九
九一年五月。

[32] 石見 尚「協同組合と多元型社会主義」、『現代と展望』三七
号、一九九四年。

[33] 藤川誠男「最近の非営利的組織に関する問題点」、『金沢大学
経済学部論叢』第一四巻一号、一九九三年二月。

[34] 宇沢弘文、高木郁郎「市場、公共、人間」第二巻第一、一九九二
年。

[35] 隆雄 誠男「資本主義分析とマルクスの方法」、『フォーラム』
98』二巻九号、一九九一年一〇月。

問題としての野坂参三

歴史の抹消と沈黙は許されるか

加藤哲郎 (一橋大学教授)
Kato Tetsuro
和田春樹 (東京大学教授)
Wada Haruki

はじめに

編集部 日本の歴史に少なからず影響を与えた社会主義運動、
その社会主義運動を良くも悪くもリードしてきた共産党、その
共産党のリーダーであった野坂参三氏の歴史には、和田先生も
指摘されているように、たんに野坂参三氏個人の功罪という問
題だけではなく、その全過程の底に横たわっている、無名の
運動家や、その家庭や支持者の存在と活動の歴史に連なってい
る問題だと思われたい。そのおびただしい人びとの活動エネ
ルギーや犠牲の解明が、もし無意味であると考えらるならば、野

坂問題もあまり意味をもたないこととなります。旧ソ連からい
ろいろな史料が出てきて、和田先生や加藤先生の論文もありま
すから、歴史学や政治学、あるいは運動史研究の分野で、さぞ
かし議論が盛んになるだろうと思っていたら、学界はまったく
音無しの状況です。それから、自らの問題としても歴史の問題
としても、先陣をきつて最も主体的にかつ深く、かつ大きな立
場から究明していかなければならないはずの共産党は、野坂問
題を組織問題、つまり除名扱いにすることによって問題を終わ
りにして封印をしてしまったかに見えます。そのことによつて、
これに繋がる多数の史実も抹消されていく。もし、これらの流
れをそのまましておけば、おそらく、野坂氏がやってきたこ

と、あるいはそれに連なっている人びとの運動のすべてが固のなかに消えていくのではないかという危惧から、この問題を取り上げてみたいと思つたわけです。

直接的には、和田先生が『思想』（九四年三月号）に三回連載された論文の「共産党機関から罪を指摘され、党を除名されたからといって、その人の活動が共産主義運動の歴史から消えるわけではない。……歴史としての野坂参三を問題にする意図は、野坂の活動に反映した共産主義運動の歴史、それを含んだ世界戦争の時代を新しく認識しなおすことである」という視座を手がかりに、最近小説に「歴史における善悪と悪情」（第19号）を書かれ、さらに『モスクワで粛清された日本人』（青木書店）を刊行されたばかりの加藤先生とともに、今日は（一）野坂問題はいかに論じられたか、（二）野坂問題はどこまで明らかにされたか、（三）野坂問題はいかなる問題か、という点についてご議論いただきたいと思つています。

なぜ野坂参三を問題にするか

加藤 いま編取部から紹介のあつた、和田先生の論文の「日本の共産主義運動はわれわれの歴史の一部である以上、この歴史

という姿勢に非常に魅かれます。同時に、「われわれの歴史の一部である共産主義運動」という位置づけをどういふスタンスで考えたいのかという問題があると思つてます。私自身は、自分が敬慕し、その生涯を追求していた、元東大医学部の助教であった国崎定洞の粛清とのかかわりで、野坂参三や山本懸蔵についての史料が現われてきたのでそこに入り込んでいつたわけで、どちらかというど、専門研究というよりは、生き方にかかわる世界のほうからのアプローチです。和田先生の姿勢には胸に迫るものがあるのですが、同時に先生はどういふ思いをここに入れられていらつしやるのかなと氣になつたんです。そのあたりからお話していただければと思います。

和田 戦後に生きてきた知識人の一人として、大きくいえば革新的な流れのなかに生きてきた者の一人としての自覚にかかわつています。社会主義は大きな問題になつたし、私自身は日本共産党と直接の関係はありませんが、『赤旗』も長く読んでいるし、非常に身近なところに日本共産党はいつも存在していた。戦後の歴史を考えると、さらに、少なくとも戦後第一期は、一九五〇年までは日本共産党は非常に大きな役割を演じているし、これをぬかして戦後日本の歴史を考えることはできない。先年、『社会主義の崩壊という事象のなかで、『歴史としての社会主義』（岩波新書）という本を書き、いろいろ論じましたが、日本の社

野坂参三問題がわれわれの目の前に現われてきた現われ方は非常に政治主義的であつたので、不適切でした。当時、新聞記者にコメントを求められて、野坂参三がいいとか悪いとかいつて

済ませられる時代ではない、あの時代がどういふ時代だつたかを考えなければならぬし、その時代とわれわれとの関係を考えなければいけないというようなことをいふはたかど、とてもそれは採用になるようなものではなかつたので（笑）、もつとよく説明をしなければならぬと思つたわけです。スターリンもソ連の社会主義の歴史も否定しされれば済む問題ではなくて、それによつて鼓舞されてアサシズムと闘つてきた人びとがいて、そのしるしに自分たちも連なつていふので、つまり一つながりの体の中で起つていふ出来事という感じがします。本当に客観的に、全体的なメカニズムを認識し、功績と否定的なもの全体的な構造を理解するようになったら初めて歴史化することができ、新しく出発できるのではないかと思つています。そういう態度で対応できないと思つていましたので、野坂参三問題をひとつの手がかりとして、論じるという氣になつたのです。私は加藤さんと違つて、この問題についてはほとんどまったく素人だったので、知識も浅く、いろいろなことがよくわかつていないところでやりましたので、不十分なものです。

加藤 野坂参三問題は素人な感じがしますが、和田先生と違つたのは、私たちが学生運動にかかわつていふところの野坂参三というのは、既のおじいさんともいふが、当時の革新統一戦線の問題では、一方の極に日本共産党がいて、その日本共産党の幅広さを支える一つのシンボルみたいな存在で、占領期から五〇年問題、そして愛される共産党といふところを通りすぎたイメージだつたんです。逆にいえば、宮本顕治とか不破哲三とか政治路線を作る人たちとは違つたシンボリックな意味があつて、理論的にいふよりも人間的に愛されるシンボルだつたわけです。

九二年に『文芸春秋』の新しく見つけてきた史料で、じつは三〇年代に同輩である山本懸蔵やその妻関マツをコミンテルンに売つていたといふ話が出てきて、共産党もすぐに除名するといふ対応をする。愛される共産党のシンボルとしての野坂参三とはなんだつたんだらうという問題を感じていふ。そこに、私の場合、国崎定洞の研究のなかで野坂参三と交差してきて、シリアスな問題になつたわけです。

和田先生のこの論文は、上・中・下の三部構成で（上）は三〇年代ですが、（中）、（下）と読んでいきますと、むしろ戦後改革のなかでの野坂参三の役割、とりわけ天皇制の問題や日本国憲法とのかかわりで野坂の独自の考え方を積極的に問題にしているような氣がするんです。そんな読み方でよろしいんでしょうか。

旧ソ連公文書館の新史料の評価をめぐって



和田君樹氏

和田 そうですね。最近の状況でいうと、中村政則さんが天皇制の問題を論じた末に、象徴天皇制と天皇制廃止と、それからそれらと遡る第三の道があったんじゃないかということを書かれて、そこで野坂の考え方に注目をされる。これが、最近、野坂氏が問題に再びなりかけてきた新しい動きだったと思います。

私は一方では、朝鮮戦争のことを調べていて、コミンフォルム批判のことにぶつかりましたが、野坂の新しい資料をみる機会があり、戦後第一期の問題はやはり天皇制の問題だったとあらためて思いました。その点で野坂氏の立場は、調べてみればみるだけ注目すべきものだという感じになりました。

加藤 私ももともとそういう理論的な問題に関心がありまして、かつては三二年テーゼとか、社会主義革命か民主主義革命とかいう問題をやってきたわけです。けれども今回は、じつはそういう問題を意識的に捨象して考えるようにしました。ですから、先生の『思想』の論文は、逆に非常に正統的に追っかけている感じがしたんです。

私たちの世代でいえば、荒木義修さんの、和田さんも使っている『占領期における共産主義運動(奮闘)』という本が出て、野坂が政治史の対象になってきた。学問的意味での研究は、共産党史・共産主義運動史の研究の側でも、徐々に出てきていた局面であつたわけです。和田先生の論文でいえば、「それが特別な意味をもつのは、野坂問題をめぐって新しい史料が公開され、新しい検討が試みられており、いつその分析が可能でもあり、必要でもある」という文脈になる。これは、野坂問題、日本共産党の問題にかぎりませんが、グラスノスチの時期から徐々にソ連の国内で歴史の見直しが始まり、史料がボツボツと出はじめて、八九年の東欧革命から九一年のソ連の解体でいつまに新しい史料が出てきたわけですね。七五〇〇万点とい

〇〇〇点とかといわれます。そういう新史料が出てきた。新史料が出てきて、それまでの戦略、戦術の流れとか、天皇制にたいする態度というレベルの問題にとどまらない、共産党とはなんであつたのか、ロシア革命とはなんであつたのか、それを支えていたのはいつたという人びとで、どういう関係のなかでそういう運動にかかわつたのか。それが、タイムスリップするようなかたちで追体験できる史料がとつと出てきたわけです。私などはその一部を追いかけて、野坂参三に売られた山本薩蔵が、じつは国降定海ら「同志」を売っていたという日本人密告のメカニズムを見いだした関係になる。

その経緯からいいますと、たしかに戦後の野坂理論、たとえば天皇退位論や平和革命論などの問題は論じられなければならない。それと三二年テーゼとの関係の問題が、戦後日本の運動



加藤賢助氏

に微妙なギャップをもたらした。三二年テーゼの後、野中さんがはつてきた人たちと、三五年のコミンテルン第七回大会の路線を受け入れて、それをある程度実践して中国から日本に帰ってきた野坂とのズレという問題が、戦後日本の出発の時点で、日本共産党の政策のうえでも、戦後改革がどういふかたちで進むかという政治史のうえでも、大きな意味をもつたことは否定できないと思います。ただ、それ以上に大きな、和田先生の言葉でいえば、世界戦争の時代なり世界革命の時代といわれた二〇世紀全体を見直す一つの材料を、旧ソ連公文書館文書の公開がもっているのではないが、という意識が私などは強い。

その意味では、ロシア革命とはなんだつたのか、野坂の所属していた共産党、国際共産主義運動とはなんだつたのか。そしてそれがなぜ、一九三〇年代に、あるいは戦後の一時期に人びとを引きつけたのか、そういうあたりが、私にとっては、非常に大きな問題です。政策転換とか戦略、戦術の問題とかは、どうもそこで自分なりにフレームワークをつくってからアプローチすべき対象なんじゃないかという意識があります。逆にいえば、先生も個々の問題、朝鮮戦争とか野坂の問題では、新史料を発掘し、それに基づいて研究されているわけですから、まだまだわれわれが想像もできないような、歴史評価をゆるがす問題が出てくるんじゃないかという問題意識が強いんですが、いかがなものでしょう。

和田 だいたい賛成ですが、ちよつと通うところもあるんですね。ソ連の歴史については、スターリン批判以後、長い歴史がありました。ソ連の歴史家たちも非常に苦勞して、絶えざる闘争のなかで古文書館を開いて史料を見てくる。古文書館で史料を見てくることはソ連以外の私たちもしてきました。制約はありますが、ソ連の歴史家ががんばったので、ソ連史の筋というか骨の部分についてはかなりのところが明らかになってきているわけです。新しい史料でソ連史の見方ががらりと変わるかどうかという、それには私は疑問をもっています。もっと細かくなつて、もっとリアルに問題点が出てくるということはあるでしょう。たとえばレーニンについて、ヴォルゴゴーフが新しい史料に基づいて書いていますが、レーニンが人を殺せという命令を出したなんてことはもうみんなわかっていることで、別に驚くこともなにもありません。

ところが、問題が一番大きく出てきたのは、国際関係なわけですね。コミンテルンとソ連の外交政策ですね。この部分はソ連の歴史家がしてきたことは、率直にいうと非常に不十分でした。史料はほとんど聞いていないに等しかった。この部分において非常に大きな変化が生じたということですね。それ以外では、ソ連軍の史料の公開は大きな意味をもつと思います。そういう広がりの中で、はじめて論じようような問題がどんどん開

いてくるとは思いますが、このくをどう考えたらいいのか。私は、ロシア史や旧ソ連を研究していた人たちの研究会で、この主題で何度か報告してきましたが、みなさんに感心してはもらえないんですが、反応が鈍い。私はもともとロシア専門ではないから、史料をあけるからみなさんでやつてよ、というつもりでいろいろ公開するんですが、それを本格的に研究するというパトスが旧ソ連、東欧の研究者の方々からなかなか出てこない印象をもつんです。先生の場合にはどんな感じになりますか。

和田 ロシア史を研究している者にとつては、一九五六年のスターリン批判から六一年の第二次スターリン批判、その時が非常にショックを受けました。その時活躍した人は菊地昌典さんで、その時はそういうことは問題にすべきでないとかいろいろな議論があるなかで『歴史としてのスターリン時代』を書かれたりしたのです。それで、今の学界の主流としては全体としてシステムの問題に関心がいついて、そこでの個々の人間の運命という問題とは少しずれるところがあるんですね。しかしこれを分けていくのは問題だということ、もういつべん問題にしていかなければならないという気運はありますけれども。いまはロシア史の研究者たちも良となれば、一〇人くらいはモスクワに行っている状態ですが、あまりにたくさん史料があるから、どこに入つてどうやったらいいかと迷うところがある。

ですから、そういうことに取り組んでいくことが、むしろロシア史以外の人たちが積極的に、ヨーロッパの東欧問題の取り組みとか、ロシア以外で広がってくるということは、非常に意味があることだと思つてます。

問題は、そういうこととわれわれの関係、われわれの時代、われわれの歴史として、われわれの世界のなかに入れて、われわれも考えてみるということは、相互方向の努力ではないかと思つてます。つまり向こうの史料を分析して、それとの関係で開けてくるものと、われわれ自身が自分の歴史を見直すという努力をくつつけていかなければならないと思つてます。その意味で、新しい史料が決定的だという点ではまったく同感です。

なぜ歴史研究者は沈黙しているのか

加藤 和田先生は野坂参三、私は国崎定洞と山本懸蔵を中心に追跡してきたわけですが、編集部の表現でいえば、たしかに「学会は沈黙、共産党は抹消」という状況がある。私のケースでも、いろいろな反響はあるけれども、真正面から学問的に答えてくれるというスタイルの書評・論評は非常に少ない。一部の新事案に注目し、こんなことがあつたという取り上げ方です。それから和田さんの論文についても、いろいろな研究会で話題にはなるんですが、それを活字として本格的に論じよう

テーマによつては一夏ではあまりたいしたものが出てこない、でもこつちのテーマだつたらすぐに出てくる、というような雰囲気もあつて、専門の歴史家もちよつと悩んでいる状況で対応が悪いということではないかと思つてます。

ただ、問題はむしろ日本の歴史をやっている人たち、日本の共産主義運動、社会運動を研究している人たちのほうが、むしろ積極的に問題に取り組んでいつて、反論もすべきではないかと思つてます。そういう人たちのなかには日本共産党系の学者の人たちも多いんですから、よけい熱心になつてこの問題に取り組んでいく、共産党ができないんだったら、学者として取り上げてやつていくべきだという気がするんですけど、そちらが弱いですね。

加藤 そういう意味では、大丸義一氏のような日本共産党史を専門にやつてきた人たちが本格的に研究、発表すべき性格のものだと思つてます。けれどもおそろく、そういう人たちの側からすれば、こういう反論が出てくるだろうと思つてます。要するに史料がどこにあるかわからない、無教に出てきそらだ、何が出てくるかわからない、どこから手をつけていいかわからない、と。しかも日本の場合には、特殊にマスコミ主導でもいいますが、和田先生も「日本共産党の暗部を暴撃する」という問題意識から」という言い方をされていますが、テレビや新聞や週刊誌の関係のジャーナリストが出かけていつて、問題、コト

一の価格もつり上げたみたいですが、ソ連側の専門家をつかまえて、彼らから吐き出させて、それを使って一点突破的にセンセーショナルに出してきている。こういうかたちで、この二年ほど、日本でこの種の史料が出てきている。

そういう意味では、歴史家としては危なっかしくて手をつけられないというかもしれません。膨大な史料が出てきているが、それは面白そうなどころから手をつけられていて、なかなか全容が明らかにならない。これから本格的に研究が始まるという局面での沈黙だと考えれば、学会の沈黙もある程度理解できる。ただ、そこから新しい歴史の見方なり、歴史の解釈なり、史実の再構成ができるんだということは、少なくとも和田先生や私の研究をつうじて、ある程度明らかになってきていると思えますから、ぜひ日本史の研究者には、こういう観点での取り組みを要請したいと思えます。

それから、共産党の側は、ちょうど同じ時期に『日本共産党の七十年』という公式党史が七二年目によやく出て、野坂をソ連のエージェントとして扱うという基本線で書いている。戦前にまでさかのぼって公式党史から抹殺するという扱いで新しい党史を出したわけです。これについては、私の本のなかでも書きましたが、野坂問題を含む党史の見直しは始まったばかりで、これから「七十五年」や「八十年」が出るのかどうかは知りませんが、日本共産党の党史が学問の対象として本格的

交際して、外務省にお金を出して、アルトープの仕事を手付け公開させるようなことをしているんです。しかし、これだけジャーナリズムが突撃的に史料をとっているのは日本と韓国だけです。お金を払って史料をとってきて、それが学者の史料のレベルよりも非常に高くなっているわけです。そこで学界としては少々無然としているわけです。

一方、共産党のほうは共産党ですから、委員長が独占的に歴史を書いているという状態で、そこからは史料の公開はあまりないわけです。だけれども、そういうふうに突撃的に史料を使って、それを手がかりとして広げてやっていくことは必要なわけです。それがなければ、われわれは野坂氏の問題もよくわからなかつたんですね。ただ、それにしても困るのは、政治には駆け引きが入りますから、史料が隠されたり、出所を曖昧にしたりする。共産党のほうでは史料を引用しても他の人に全体を見てほしくないから、どの史料かわからないようにして自分に必要などころだけ引用するという態度をとったりする。これが困ります。これは資料をみる人のモラルの問題ですが、これはやはり学界のレベルの反映だと思います。学者の世界がもう少ししっかりしていれば、そういうことにはたいしてある程度コントロールできるわけですけれども、今の学者あるいは学界は政府も委員長もコントロールできていませんし、ジャーナリズムも共産党もコントロールできていないわけです。そういう状況の

的に論じられなければならない時代に入ったということを強調しておきたいんです。

編集部　そういう時代に入ったとはいっても、実際には歴史学者も政治学者もこの問題に沈黙している。なぜ学者が沈黙しているかという点、たとえば、歴史的事実より党派性を優先することが正しいとする倫理的立場が共産党系の歴史研究者を支配している問題がひとつあります。しかし、なぜかこのことを共産党系でない歴史学者もあまり問題にしていません。そのこと

によって、広く深い史料検証はますます困難になっています。岡先生とも、史料の取り扱い方の問題で苦勞さが、問題にもなっていますが、一方で共産党の資料独占と、他方で一般ジャーナリズムの史料の商品化という壁が大きな問題としてあると思います。それはいいかえると、やはり、その問題を究明していく歴史的意義が理解されていないからではないかと思うわけですが、史料の取り扱い方についてはいかがお考えですか。和田　不幸なことではあるんですけども、史料をめぐる現状はやむをえないかなと思うんです。今、出ている史料は、日本共産党もよく調べになつたと思えますけれども、文春の小林峻一さんたちが獲得された史料は、正面から歴史家が行って、ドアを叩いても、出てこない史料ばかりなんです。もちろん全世界で史料を公開させようとしています。冷戦期の史料はアメリカがチームを送つてやっています。財団がロシアの外務省と

なかで自分たちがなにをしていくか、なにをしたいか、という方法を切り開いていくかという主体的なものが学界のなかから出てこなければいけないと思うんです。出てこなければ、押し流されていってしまうのではないかと思います。

加藤　私が使った『国境定洞ファイル』というのは、小林峻一さん、加藤昭さんの収集されたもので、直接野坂問題に関係しないからというので、いわば副次的に出てきたものなんです。それを日本の官報史料なども参照して詳しく読んでみると、また野坂に跳ね返っていくという性格をもっている。それと関連して、三七年四月に逮捕・粛清された須藤正尾という人のことも調べてみましたが、これもどうも北梅太オハ石油鉱業所の労働運動に関係していて、それを指導していた山本藤藏のところにつながってきた。つまり、いろいろなことが傍流の史料からでも出てくる。その意味では、日本共産党には、不破氏の本『干渉と内通の記録』(新日本出版社)と一緒に生の史料集を出してほしかったですね。学界についていえば、そういうものを学術的に収集・整理して、法政大学大原社会問題研究所や北海道大学スラブ研究センターみたいなところで保管し、学界に公開できるような研究体制をつくる必要があるんじゃないかと痛感しているんです。

ただ、新史料はまだ出はじめた局面、和田さんや私を手づかいはじめた局面で、むしろ主体的な構え、そこには歴史研究の

ものがいっぱいあって、そこから新しい学問が出てくるんだと
 研究対象にするんだという構えが生まれてい
 る。このほうが大きな問題だという気がしますね。
 聞いておきますと、文書については限定的な目
 コピーさせていて、全文公表ということは特別許可
 がなければダメだということになっているんです。だから加藤
 さんの史料は全文公表されていて、おそらくこれは文書館側か
 ら見ると問題があるということになるでしょう。テレビ局のほ
 うは、番組に使うことでもらっているんだから、別の使い方は
 できないということもいいますね。そのへんを少しクリアしな
 ければならない。読むのはいいんですけども、使ったものを
 史料集として発表する時にはまた別の許可がいると思いますね。
 加藤 新しい研究者がなかなか出てこないとか、史料が出てき
 ているのに研究が始まらないことのもう一つの意味は、じつは
 日本では、共産党史のようなテーマは学問的研究としてはまだ
 確立されていない。しかも日本共産党が現存する以上、なん
 らかのかたちでそれに言及しなければならぬ。けれどもそれ
 に言及すると、少なくともこれまでは、共産党の側から公式党
 員としてのさまざまな批判がなされて、その人の人格まで傷
 められることまであった。そこからある種のタブーの
 意識が生まれてきたのだと思います。

加藤 三三日本共産党史が日
 本で学問の対象として確立するかの、ひとつのテストケースに
 なるんじゃないかという印象をもっています。

和田 いまのような条件がありますから、問題が出される時は、
 正統にたいする異端を狩り出す正統論争になってしまう。
 仲間を売らない共産主義者が正しい共産主義者で、「内通者」
 はいけななんだという話になるのです。結局「人民の敵」だ
 といつて粛清した人が、今度は「人民の敵」として告発される
 という、レッテル貼りになるわけです。客観的に、レッテルを
 はずして、実際どうであったかということ冷静に見ることが
 必要です。あの世界では、熱心にフランスムと闘う人は、やは
 り熱心に疑わしい仲間を告発して死に追いやる人もあったと
 いう、悲劇的な条件もあるわけです。そこを見なければ問題はち
 ゃんと解決しません。そうではなくて、昨日までの英雄が一転
 して落ちた偶像になるということまで否定していくということが
 必要なのは、政治のあり方としては非常に不健全です。
 ところがこういうことが繰り返されるとは思いませんけれども、
 少なくともそういうことをやっていたんでは、今の時代に新し
 く前進できる政治に転換はできないと思いますね。ですから、
 そういう悪循環の議論からは脱して、新しい態度を確立しなけ
 ればならないのだと思います。

共産党の本には反論がないので、安心しているようですが、

日本と韓国の話がありましたが、イタリアでもトリアツティ
 に関する新史料がソ連から出てきて、トリアツティがなにをや
 ったのか、イタリア共産党が金をいくもらっていたとかいう
 ことが明らかになった。しかしイタリアでは、それ以前の時期
 にイタリア共産党史についてスプリアーノのものとかグラムシ
 研究所のものとか、いわば客観的な党史研究が学問としてある
 程度できていた。そこに新史料が出てきて、スキヤンダラスに
 も扱われなければ、学問的な新史料としても使われるという、
 党史研究と現実政治が完全にはドッキングしないかたちで進ん
 ているんです。

しかし、日本の場合には、まだ研究すること自体がすぐに政
 治的な問題になりがちで、和田さんの論文についても「なぜ共
 産党は反論しないのか」という人がいますし、私のものについ
 ても、学界の反響よりも「共産党はなんていつている？」と聞
 く人がやはり多い。

共産党は『闇の男』については、加藤昭氏・小林峻一氏の週
 刊誌の記事についてはずいぶん批判したんですが、この本自体
 については直接の批判を出していないようです。和田さんのも
 のにたいしても、私のものにたいしても、共産党は直接的に批
 判の対象にしていない。逆にいえば、レスポンスがないから、
 沈黙しているともいえますけれども、これがこれからどうい
 うかたちで進んでいくのか、新史料がさらに豊富になつたとい

イタリア共産党は前から、イタリア共産党の運動を研究する研
 究者には党のアルヒブを公開するということをしてきたので、
 日本共産党にもそれくらいいつてほしいわけですよ。ソ
 連共産党の文書を見せてもらっている今の状況ですから、それ
 が新しい時代の立場ではないかと思えます。そういう態度をと
 って、加藤さんのものについても私のものについても、議論を
 してほしい。共産党の歴史は共産党だけのものではなくて、あ
 る意味で全体の歴史の一部なので、みんなの議論に委ね
 ていくという態度をもたなければいけない。昔が歴史の解釈を
 独占することになると、その影響下にある人びとのなかに一種
 の情性として自主規制が働きますから、問題だと思います。
 編集部 岡先生が、野坂問題を解明していくの先にどうい
 う問題、あるいは意味を見いだしておられるか、そして研究して
 いくうえで課題や要望みたいなことがありましたら聞かせて
 ください。

加藤 私は控えめに、せめて戦前の部分についてだけでも、日
 本共産党の党史資料室のもっている史資料を公開してほしいと
 言いたんです。つまり、七二年の自らの歴史を一九二三年から
 今日までストレートに正統史観で貫けるんだという態度を共産
 党がとりつづけると、どうしてもそこからはみ出すものを抹殺
 したい、隠したいという思考が出てくるんだらうと思います。
 しかし七〇年というのは、歴史の対象としては十分に長いもの

で、しかも戦前の部分はそのなかの二十数年です。そういう時代の限界についてのある種の連続が共産党の側から積極的に現われて、どこかわからず、それが日本の民主化や社会主義・共産主義の運動、反戦運動、獄中闘争とも結びついていたということ、あらためて学界の判断に委ねるとい、いわば高い見地を政治の側にとつてもらいたいという気がします。

和田 戦前の共産党の歴史は転向の歴史も含めていろいろ複雑な間題がありますね。かたちとしてはめざましい闘争を展開したという運動ではなかったかもしれないですけど、戦前の天皇制にあれだけ抵抗した運動があつたということが、戦後の日本共産党に知識人たちがやはりこれだけ強く吐かれ、またマルクス主義の影響がこれだけ強く、また総じて革新的な知識人が多かった、そして戦後を支えてきたということと関係していますね。ですから、その意味で、戦前についていえば、思い切つて史料を公開して、もつと全体的に議論をしていくという態度をとるべきだし、焦点になっている、戦後改革期、一九五〇年までの時期についてもそうです。

世の中が変化していつて、革新的な立場が総じて必要なかった、無駄だったという議論の前に立たされているわけですね。われわれが何者であつたかということをも証明しないと、総じてそれは必要なかった、戦前の誤りだつてよかつたときないか

（注）五〇年問題である

るという感じがしますね。

五〇年からの問題になつてきますと、五〇年問題こそ新しい角度から研究されなければならない。やはり朝鮮戦争と日本という問題は研究も少なく、空白になつている。共産党と在日朝鮮人の運動にたいして配慮しなければならないと考えるから研究ができないんです。それと関連していうと、この『日本共産党の七十年』には、共産党の本史の中に一九四九年の朝連（在日本朝鮮人連盟）の解散がないのはかりにいいとしても（それも問題ですが、年表の「世の中の動き」のなかにも、朝連の解散が出てこないというのはかなり問題を感じます。

それも含めて、やはり日本共産党と在日朝鮮人運動総体との関係も、しつかり研究すべきところに来ているんじゃないか。

そのあとに来るのは六全協ですから、六全協より連共産党の関係というものは、これから新しい史料が出てくるところでしようけれども、そこは隠していても仕方のないことですからね。基本的なことは『七十年』にも書いてあるんですけど、歴史として整理しなければならないところに来ているんじゃないかと思ひます。

加藤 朝鮮戦争の評価が『日本共産党の六十五年』で、それ以前にハンガリー事件の評価とか、日本共産党自身も歴史評価を変えてきている部分がある。もちろん今回も野坂問題が入つたことによつて政治的に変えられた部分があるんですが、ある意

こそ対象化しなくてはいけないんじゃないか。そこでまた新たな蓄積があれば、それが共産党の公式党史にも反映していくという、正常なサイクルに戻つていくんじゃないかという気がします。

和田 実際は、朝鮮戦争のことになれば、私は当時中学生でしたが、私より上の人は大学生であつたわけですし、みんな同時代の問題です。だからほとんど問題状況はわかっている人ばかりです。ところが新しい世代は、まったくそれと切れたかたちで存在しているわけでしょう。なんといつても新しい学問をやつていく時には、新しい世代の人が積極的に参加してくれなければなりません。ところが、古い世代の人が、自分たちの過去の経験について語りたがらない、沈黙してしまつているという状況になつているのが問題だと思います。

朝鮮戦争について、朝鮮戦争は北が先に攻めたかどうかという問題で、考え方を要するのとは簡単ですよ。だけど、それと自分たちの関係はというと、「自分たちはレッドバースで被害を受けた」というだけではないのであつて、やはり自分たちは在日朝鮮人といつしよの組織で闘つていたんですから、そこを含めて全体をどう見ていくかということについて自分たちに引きつけて問題を再評価していかなければならないはずなんです。それは切れてしまつているという問題がありますね。朝鮮戦争問題は共産党だけでなく、日本のインテリにとっては非常に大

朝鮮戦争については、史料を含めて学界でいろいろな議論があつて、それを共産党が受け入れたという性格だつたと思います。ハンガリー事件についても、学界というよりは海外の動きを含めて、それまでの研究の蓄積や新しい史料と評価が出てきて、それを日本共産党が公式の党史に受け入れた。ところが今回の野坂問題については、いわば不意打ちを食らつて、だから対応も慌てふためいたかたちで、『七十年』党史に急いで突っ込んでしまった印象を受けます。その意味では、野坂問題自身はまだじっくり研究がなされなければいけないのに、歴史的評価だけは共産党の側から切り捨てられ、また世間一般でも定まつてしまつて、もう研究すべき対象ではないという感じになつてしまつて、これは、ペレストロイカ以降の世界史の動きを誰も予測できなかったこととおそらくは関係しているだろうと思ひますけれども。

研究者・知識人の側の問題としては、さきほど和田先生がおつしやつたとおり、日本の学界が歩んできた戦後の伝統の非常に大きな部分に史的唯物論とかマルクス主義とか、あるいは反戦・反アナンショというよな、共産党をも一翼とした運動の流れがビルト・インされてきたという問題ですね。これは、その世代の人だけの問題ではなくて、日本の学界全体が、とりわけ社会科学の学界が全体として引きずつている問題として、今

きい問題点ではないかという感じが最近とくにしています。
 編集部 和田先生が韓国・朝鮮の研究者や運動家と接触されて
 たとは野坂問題のようなニュースを、なんらかの問題
 として見ているということがあるんでしょうか。

東アジア的視点の必要性

和田 韓国では朝鮮戦争の問題を非常に熱心に研究しています
 けれども、日本の問題はほとんど議論のなかに入っていません。
 野坂問題は話題になっているので関心をもってきているところ
 ですが、それはこれからではないかと思えます。アメリ
 カでは、ブルース・カミングスが朝鮮戦争について非常に批判
 的な研究をしています。日本のことはほとんど入っていない。
 実は、日本の戦後の運動は、ソ連とも中国とも朝鮮とも非常に
 密接な関係がありますから、東アジア的に研究しなければなら
 ないわけですね。野坂氏もソ連から中国に行つたわけだし、朝
 鮮を通じて帰つてきたわけだから。そういうことでいえば、伊
 藤律問題なども、朝鮮における朴憲永らの南労党グループの南
 清問題と関連させて考えなければならない問題だと考えていま
 す。野坂氏の研究も見えていませんが、そういう方向だと

のが新しい行き方ではないかと思えますし、非常に実りがある
 と思います。韓国のほうは、今、モスクワに二〇〇人くらい行
 つているといいます。ものすごい勢いで人が行つて史料をとる
 うとしているんです。

編集部 それはどういう理由からですか。韓国の社会運動のな
 かに、なにかその必然性があるんですか。

和田 ノーマルに学者のキャリアで派遣されていった人もいる
 し、なにか一山当てようと思つていった人もいるし、もう韓国
 にいってもどうしようもないから勉強してなんとかしようとい
 う人もいるし、動機はいろいろありますね。ですけど、とにかく
 量がすごいですね。

加藤 私は、野坂、國崎らの問題と並んで、同じ南清期に犠牲
 になった約八〇人の無名の日本人の活動家に当たりはじめてい
 るんですが、そこで突き当たる問題が、ソ連と東アジアの関係
 です。ほとんどはいませんが、相当の日本人南清犠牲者が
 朝鮮人名をつけられているんです。文書が出てきてはじめて日
 本人だとわかるケースが多いんですが、おそらく逆のケース、
 朝鮮出身の人で日本人名を名のつた例もあるでしょう。三〇年
 代の南清犠牲者のなかで、朝鮮人の名前で殺されていった人の
 なかに、相当数の日本人がいるだろうと予想しているんです。
 これは日本国際問題研究所の都沢行雄さんから見せてもらった
 資料なんです。シロフという人が九〇年にゴッソフサベリン

分についてはほとんど研究がない。韓国の人たちが今、どうい
 うふうに調べているのかはわかりませんが、この研究が
 進むと、加藤さんがなさっているお仕事と連絡されて、新しい
 世界が開けるんじゃないかと思えますね。
 加藤 そういう意味では、今回の和田先生の野坂研究が、四五
 年のモスクワ行きの問題を含めて延安時代、そして戦後の五〇
 年問題のところまでを追つかけられた。広い視野で研究なさつ
 たので、彼の繋がりとかが、中国や朝鮮の問題を含めて、野
 坂参三に象徴される日本の共産主義運動を対象化するフレイム
 ワークをつくつていただいたという意味で非常に貴重なと、私
 は受け取っています。
 和田 加藤さんのお調べになつた國崎と一緒ベルリンで組ん
 でいた李康国という人がいますね。あの人は朴憲永のグループ
 で北朝鮮で一九五三年ころ殺されるのです。この流れもありま
 すね。
 加藤 そうですか。ベルリン反帝グループのアジア人について
 は、中国は千田長也さんが行つて調べてきたものですかからある
 程度明らかになっているんですが、朝鮮関係はじつはほとんど
 手つかずです。
 和田 この人は、コミンテルンの人民戦線方針を朝鮮の共産主
 義運動に持ち込んできた留学生のグループの一人で、京城大学
 を出た人です。最終的には北朝鮮で南清されてしまつたんですけ

いくと必ずどこかで東アジア共産主義という問題に突き当た
 る感じがします。
 和田 ソ連の朝鮮人については、一九三七年に一六万人くらい
 が泊増州から中央アジアに強制移住させられましたので、その
 問題についてはずいぶん史料の蓄積がなされていますし、その
 プロセスで南清された人のこともだいぶ出ていますけれども、
 コミンテルンの関係、コミンテルンの朝鮮セクションという都

れども。

加藤 野坂先生の野坂研究がコミンテルン研究に収めていたもの、ものはだいたいイメージできるんですが、和田先生の場合は、野坂研究というのは、どのような方向へ深まっていくことになるんでしょうか。

和田 そうですね。私の関心はやはり、戦後のわれわれはなんだったのかということですね。差新的な知識人とはなんだったのか、これからどうしていけばいいのか、という問題と関係するんです。それは研究のテーマではないのかもしれませんが、野坂問題についていえば、六全協くらいまでやってみてという気はしているんですが、ただ史料的な問題で、そこちはまだ開いてませんから問題がありますけど。

野坂参三をめぐる謎

加藤 野坂自身に即している、たとえば、山本懸蔵を売ったのは野坂ではないかとか、四五年に彼がソ連に寄ったんじゃないかということ、調べてみますと、意外と幅広く噂みたいなものが存在していた。ただその裏づけがなかった。そういう史料をめぐって相当程度に知られていて、しかし、それ

と、日本では議論されていませんが、世界の研究者に見せたら、これは密告の手紙とおそろくおらないと思います。いずれにしても、史料が開いてくるといろいろなことがわかってくるわけですが、史料が開いてもわからないことがたくさんあるんですよ。スターリンなんかはほとんど手紙を書きませんから、スターリンの伝記は今以上に詳しくならない。ヴォルゴゴロフの伝記以上にはいかないわけです。それ以上は他の記述から推測するとか、想像力で補っていかなければならぬわけです。ですから、史料がないところでも、想像力、類推力、分析力を働かしておかなければ、新しい史料も生かせるなくなってしまうという問題もあるわけです。

野坂氏の問題については、日本帰国前にモスクワに行った際の、キリチエンコ氏も日本共産党のほうも、ソ連のエージェントになったと結論してしまっているわけですが、これ

加藤 野坂の問題は、立花隆の『日本共産党の研究』では、三一五で捕まって三〇年に保釈される、例の眼病のあたりから出てくる。三一年の四月にソ連に渡る時にはたしてエージェント(信任状)を持っていたのかとか、風間文吉らの中央委員会決定がどのようなものであったのかとか、渡航時にソ連側にとり扱われたのかとか、そういうタイトルレベルになりますと、

年の立花隆氏の『日本共産党の研究』などでいわれていた問題、相当程度今回出てきている側面があるわけです。そのへんを野坂研究に即してどういふふうに考えたらいいのか、ちょっと引っかけられている問題の一つです。荒木氏の研究は、そこを埋める作業であつたと思うんですけども。

和田 ソ連共産党史についていえば、相当のことまでだいたいわかってたという歴史があるわけですね。そこでわかってたことからわれわれとしては類推しなければならない問題があるんじゃないかと思えます。モスクワで日本共産党の関係者はほとんどみんな逮捕されて、野坂氏しか生き残らなかつたんですから、野坂氏としては、「逮捕された人びとと自分は違う、その人たちはスパイをしたのでけしからん」といふふうにいわなければならない立場にあつたということは、常識的に想像できたはずのことなんです。しかし、そういうことは誰もせずに来たということなんです。まったく宙に浮いたよきなかたちで考えていたというところに問題があつた。つまり史料がなくとも、そういうことは他の状況から類推すればわかるのに、そうせずに来たという、私たちの考え方のある種の欠陥が出ていたように思います。

野坂は山本懸蔵についてあんな手紙を書いたということ、

まだまだ謎はいっぱい存在しているわけです。

たとえば、彼がソ連秘密警察のトリリツセルと、GPUなりNKVDと繋がっていたとしても、当時の日本からソ連に共産主義者が渡航するという事情からすれば、密入国であるのが当たり前で、たとえエージェントを持っていたとしても、それ自身も国境警備隊は疑ってかかるのが当然でしょう。彼がそのさいなんらかの供述をした記録がモスクワに残されていて、それがいろいろなかたちで使われるだろうというのもありうることで、そのへんのところは先生の論文にもよく書かれているんですけども、野坂と山本懸蔵の関係、それから山本懸蔵の評価というところでは、私は若干疑問をもっています。野坂の三九年二月のテイトロフ宛ての手紙が密告であるかどうかという問題と関係し、密告とはなにかを定義づける問題とも関係しますが、当時の共産党の指導者たちは、日本共産党にかぎらず、コミンテルンの各国代表たちは、野坂にしる山本にしる、誰がいつ逮捕されてもおかしくない状況にあつたわけです。なぜ野坂が生き残つたかという問題の解答は、和田先生の場合は、スターリンが一人くらいは日本共産党員を残しておきたいと考えたというニエアンスの位置づけが出てきますけれども、私は「残置懸蔵」という言い方をしたんです。それは、当時のコミンテルンのなかで、野坂を含む日本共産党がどのように位置づけられていたのかという問題と関係して、私は野坂もいつ

でも逮捕される状況にあったし、逮捕されなかったのは奇跡的だという気がするんです。そうだとすると、日本共産党の代表として残すというよりは、もう少し強いニュアンスが含まれていたんじゃないか。その意味では、オムス（国際連絡部）なりトリリンセルのラインなり、エジプトやベリアのラインなりと、もつと緊密な関係があったんじゃないかという疑いはもっているんです。

今日、和田先生にお渡しした「野坂龍アイル」のなかで、野坂の義龍が出撃する時の書類に「NKVDの第三部の指示で」というのが出てきます。この「第三部」というのがよくわからないために、まだ解釈ができあがっていないんですけれども、内通者とかスパイという位置づけがどうであるかは別として、当時の野坂参三がたんにコミンテルンの幹部というだけではない、ソ連共産党ともつと密接ななかかわりあいがあったんじゃないかというのが私の仮説です。そのひとつの傍証が、山本懸蔵の妻の関マツは日本共産党を除名されるんですが、野坂参三の妻の勲はなぜソ連共産党員であつたんだろうかという問題で、野坂参三もソ連共産党籍があつたんじゃないかと推測しているんです。そのへんは先生はいかがですか。

和田 実際、野坂は、あれだけ長い間、生き延びてずっと一貫してソ連共産党の立場に立っていたにもか

網渡りのようななかたちで、五〇年の時も死刑宣告を受けたも同然のところから五五年に復活してくるわけですから、ソ連共産党とも非常に複雑な関係を取り結んでいただろうと思います。

それから野坂は、アメリカとも関係がある。延安でもアメリカと関係がありましたし、GHQとも関係がありました。そしてその関係をソ連には報告しています。非常に複雑な世界で生きていた人だということははっきりしているわけですね。

荒木さんが、内務省局長の次田丈三郎という人との関係を問題にしているわけですが、これは親戚をかばったということでは理解できると思うので、日本の官憲のエージェントであるというようなことはなかなか難しだろうと思います。一番ありうる線は、ソルゲ問題で、野坂がロイだといわれている点です。ソルゲを支援するためにアメリカ共産党員になった人をスカウトするという仕事を野坂が果たすということは充分ありうる線ではないかと思えますね。そうすると、それはNKVDのほうになるか、赤軍総機務局のほうになるかわかりませんが、関係ができるということになる。「闇の男」では、モスクワに行つた最初からNKVDにスカウトされて、NKVDのエージェントになつたという説が出されているわけですが、これについて決着をつけるにはNKVDの史料を見なければなりません。共産党のほうの史料ではわかりません。ただ、NKVDのアーカイブでもっとも、加藤さんのお仕事などをみてわか

いするにたいしては、消極的な動きをしていますよね。山本や國崎についてもそうですから、NKVDのエージェントは敵を告発しなければならない。それが仕事なのです。ハンガリーのイムレ・ナジがエージェントになれば、彼は仕事をせつせとやっているわけです。もちろん使命感に基づいて、革命のためと思つてやっているわけです。そうしなければいけないのに、野坂が積極的に摘発するということをおまわりのところをみると、三二年からNKVDのそういう種類のエージェントになつたとは考えにくい。一番考えられるのは、ソルゲ工作の協力者で、もしそうだとしたら、その経歴は彼を最後に教う時に活かされるということでは充分ある。ナジは八局で逮捕されますけど二局の要請で釈放されたのですから、属しているセクションの要請で釈放されるということはあるわけです。

それから、奥さんがエージェントだという話ですが、かりに奥さんはそうかもしれないけれども、だから野坂もそうだとはいえないわけです。クレーネンの例をみれば明らかです。最後に野坂たちを教う時のことですから、ソ連共産党としては自分が影響力をもつ人間を日本に残したいということを考えるのは当然です。とにかく野坂はアメリカでの工作に派遣されるということは、特別の信任を得ているわけですよ。そ

うに二回も派遣されるという特別の信任を得ている人だということではたしかですね。だから、山本を逮捕して、野坂を逮捕しないのは当然ですよ。山本が野坂はスパイだといつていけば、これは当然問題になりますけど、それでも、山本と野坂を考えたら、山本を逮捕して野坂を残すというのはソ連側としては合理的な判断だということになると思います。野坂を残してNKVDのエージェントとして使おうとしたという判断は、これは了解されない。だから加藤さんが残置懸蔵者という表現が使われるのは問題があるんじゃないかと思う。そうではないと断定できる論拠はもっていませんが、そうだと論証するにはさうとう重い問題があると思います。最後にソ連から戻ってくる時の連絡の仕方によって、エージェントであつたことがはっきりするという説がキリチエンコと日本共産党から出されていて、赤軍のエージェントであつたということになっているわけです。しかし、非公然で連絡をとるとすれば、赤軍でやるかNKVDでやるかどつちかしかないわけです。だから、私は、野坂がエージェントとして戻ってきたという判断は問題があると思う。あいつってしまったって日本共産党はほんとうにいいのか。野坂という人間を考えずに済ませるのならいいですけど。

加藤 私はその鍵は、むしろソルゲやアイノ・クレーネンを通してわかつてくると思つて、そこを追つかけています。一つは、ソルゲ事件の官機と徳を日本に送つたロイが野

日本共産党をみることはできないし、徳田球一、志賀義雄や伊藤律を加えることでも、まだ不十分である。戦後五〇年というスケールでみる場合には、宮本顕治氏を含めた総合的研究がどうしても必要になると思います。

過去の再検討が前進への別れ道

編集部 最後ですけれども、野坂氏にしる宮本氏にしる、そういう政党のリーダーを究明していくということは、なんらかの意味で、その時代や歴史を解明していくことを意味しているわけでしょう。しかし、その歴史的な問題と現代の現実政治との間をうまく架橋できないでいるというのが、歴史学と政治学の現状ではないですか。お二人の研究が出たことできまざまに議論が高まっていくと思っておりましたが、実際には高まっていない。これでは、架橋は不可能です。その最大の原因がなにかと、このことを究明したいと思つていたんですけれども、野坂問題が今どういう地点にあるかというところで、結局、タブーにされてしまうのか。だとすれば、あらゆる歴史の犠牲は無意味となる。無意味となれば、同じ過ちを繰り返すことにもなります。それでいいのが、では学問の役割とはなんなのか。それでは若い人たちに歴史をバトンタッチしていくことはできないと思う

やはり期待せざるをえません。その意味で最後に一言お願いします。

加藤 現に和田さんは野坂参三をタブーじゃなくしたわけですし、私もわりと自由に書いています。日本共産党がフランス共産党とともに今では先進資本主義における数少ない共産党の一つであるという側面よりも、むしろ共産党の運動に後継される左翼運動、社会主義、共産主義運動、マルクス主義理論の総体がいわば忘れられていくということのほうに、私などは危機感を感じるんです。

和田 こういう問題が起こった時に自分の歴史というものを問題を切開するよなつもりで痛みをもって再検討するという姿勢をもたなければ前進がないということですね。

北朝鮮についてもよくいわれますね、北朝鮮の歴史は神話だと。歴史が神話であれば改革ができないわけです。しかし、北朝鮮ですら金日成の自伝では神話の修正を図っているんです。金日成が中国共産党員だったということを認めました。ですから、自分たちの過去にたいしてたえず再検討していく態度をとるかとならないかということは、いま前進できるかどうかの別れ道だと思いますね。それがあれば古くから運動してきた人や、新しい歴史家との間にも話が通じてくるものがあると思いますね。

編集部 長い時間ありがとうございました。